

しあわせ小箱

池の再生人 * 1

公園(三鷹市、武蔵野市)にある井の頭池。かつてはアカミミガメやブルーギルなど外来生物がのさばり、在来種は絶滅

カメラが水面をスーイスイとゆったり泳いでいる。「おー、ニホンイシガメですよ。たまにしか姿を現さない希少なカメラです。見られるなんてラッキーですよ」。穏やかな口調で話すのは、東京都武蔵野市の認定NPO法人「生態工房」事務局長、佐藤方博さん(46)。8月の炎天下、東南アジア風の笠をかぶり、汗だくになって生き物を探す姿は、夏休み中の少年のようだ。

在来種救う 水抜き作戦

の危機にひんしていた。佐藤さんは都に働きかけ、2013年度から在来種を救出するため「かいぼり」を行った。かいぼりとは、池の水を抜いて天日干しにして、外来種を一扫し、水をきれいにする作業。井の頭池では15年度と17年度にも行い、外来種のアブラコバネやブルーギルは根絶。在来種の生き物が9割を占めるようになった。今年の初夏には、絶滅危惧種の水草「ツツイトモ」が池の水面を彩り、クロード・モネの名画「睡蓮」の池のようだと話題を呼んだ。芸術のことはよく分からないけれど、かつての自然を取り戻しつつある池の光景をみんなが喜んでくれるのは、なにより励みだ。

しあわせ小箱

池の再生人 * 2

無性にナマズが飼いたくない。週末に池で小魚を捕ればいい」と考えたところ、はたと気づいた。週末は部

映画「となりのトトロ」といえば、太い幹の古木に田んぼのあぜ道」。認定NPO法人「生態工房」の事務局長、佐藤方博さん(46)は、映画のモデルといわれる埼玉県所沢市で生まれ育った。トトロが潜んでいるような里山を駆け回り、カブトムシを捕まえ、草花を集めた。夢中になると一直線に突き進む性格。中学ではハンドボール部に入部したが、わずか3日で退部した。なぜか

ナマズのため 悩まず退部

活の練習がある。「小魚を捕りに行く時間がないのでやめます」。そう伝えた時の担任のほかんとした顔が忘れられない。新設された科学部に入ると、野鳥観察にのめりこんだ。エナガ、ルリビタキなど図鑑に載った鳥が身近な森で次々と見られた。ああ、このまま自然に身を浸して生きていきたいな。「高校には行かず、山小屋に就職したい」。家族に伝えると、猛反対された。渋谷高校に進学した後も、放課後には里山で野鳥を探し回った。そこで目の当たりにしたのは、森が切り崩され、産廃処理場になっていく光景だった。悲しみや怒りがこみ上げた。「自然に浸るだけでなく、守る人になりたい」

しあわせ小箱

池の再生人 * 3

にリーダー的な存在となり、鳥が集まるよう池の水を抜き、草を刈るなど公園の整備を進めた。目に

高校を卒業後、野鳥観察の雑誌編集のアルバイトを始めた若き日の佐藤方博さん(46)。独学で生き物の生態や自然保護の知識を蓄えていった。都立公園の野鳥保護区を維持管理する大学の環境保護サークルがあると聞き、特別に仲間に入れてもらった。担当したのは都立光が丘公園。一緒に活動する同世代の大学生の中には、虫捕りや野鳥観察をしたことのないメンバーもいた。「自分がやらなければ」。すぐ

「遅かった」外来種の猛威

付いたのは、ブルーギルやアカミミガメなどの外来種だった。「このままでは生態系が壊れてしまう」。駆除しようにも、当時は「生き物を殺すのは良くない」との風潮が強かった。こっそりと網や釣り針で捕まえては駆除していった。24歳の時、仲間4人とともに環境保護団体「生態工房」を設立。そんな時、耳よりの情報が入った。外来種駆除や水質改善のため池の水を抜いて天日干しする「かいぼり」だった。2001年、手探り状態で光が丘公園の池を「かいぼり」した。オオクチバスは根絶したが、在来種のモツゴはたった2匹しか見つからなかった。「遅かったか。もっと早くやっておくべきだった」。悔いが残った。

しあわせ小箱

池の再生人 * 4

生態工房や都の職員、ボランティアら約400人が集結。水を抜き、つなぎ姿の参加者が魚

「以前はよく神奈川や宮城まで出稽古に行ったもんですよ」
認定NPO法人「生態工房」事務局長の佐藤方博さん(46)は目を細める。出稽古といっても、武道をたしなんでいるわけではない。佐藤さんの場合、池の再生事業「かいぼり」を見に行き、ノウハウを蓄えることを意味する。
2013年、出稽古の成果が試される時が来た。東京都に働きかけ、井の頭恩賜公園の池で大規模なかいぼりを行うことになった。

「幻の水草」60年ぶり発見

の背びれを追いかけた。「そっち行ったよ」「魚取れた」。楽しそうな声が響く中、佐藤さんは水たまりに厳しい視線を向け、外来種が潜んでいそうな所を次々とつぶしていった。
1回だけのかいぼりでは、外来種は根絶できなかった。翌年、池でブルーギルを見つけ、た時には「こんちくしよ。次こそは……」。自分の力不足に唇をかんだ。
それでもギンブナなど従来の魚が増え、2回目のかいぼりを終えた16年春には、幻の水草「イノカシラフラスコモ」が約60年ぶりに発見された。凶鑑でしか知らない自然がよみがえり、「本当にこんなことが起こるんだ」。大きな手応えを感じた。

しあわせ小箱

池の再生人 * 5

場を水生植物を根付かせる。と、小魚やエビがすみつき、餌を求めてカルガモなど水鳥が足を運ぶようになった。愛らし

3度のかいぼりで在来種の生き物が復活しつつある東京・井の頭池。だけれど、まだまだやらなければいけないことが山積みだ。
認定NPO法人「生態工房」事務局長の佐藤方博さん(46)の頭にあるのは、湧水が枯渇した1960年代より前の池の姿だ。当時の文献のリストには、多様な動植物の名前が並ぶ。
そのために力を入れているのは、池と陸地をつなぐ浅場作り。浅

美しい水辺 終わらぬ格闘



文・樋口絢香

い姿を園路のすぐそばで観察できる。
しかし、池には今も難敵が息を潜めている。幻想的な景観を作り出す水草を食べ尽くしてしまうアメリカザリガニだ。
かいぼりで池の水を抜いても岩陰に隠れるすばしっこいヤツで、最新のワナで駆除の真っ最中だ。
「完全に駆除するのは難しいので、ごくごく少ない状態を維持していくことになる」。池の再生に向け、外来種との闘いは続く。(了)